

マスメディアにおける他者化言説の形成過程

—韓国での結婚移住女性に関する時事報道番組を中心に—

Media discourse on migrant women in South Korea :
The “Othering” process in mass media journalism

李 美淑* Misook, LEE

1. はじめに

アジア地域における経済グローバリゼーションは国境を越える人々の移動・移住をも加速化させている。80年代以降、日本、台湾、韓国への移住労働者の増加はその一つの例であろう。しかし、「労働」という枠組みだけでとらえられない移住も増加している。「国際結婚」による移住がそれである。日本、台湾について、韓国も90年代以降、アジア、旧ソ連などの地域からの女性との結婚が増え始めた。特に、2003年はベトナム人女性との結婚が目立ち、「国際結婚ブーム」と呼ばれるほどであった。現在、韓国では国際結婚件数が全体結婚件数の10%以上を占めており、その子供たちは58,000人¹にも上る。

このような多文化・多人種（多民族）的な社会変化に対し、「韓国社会も多文化社会に突入した」という、いわゆる「多文化議論」が新聞、放送を中心に行われた。しかし、韓国男性と結婚した外国人女性－結婚移住女性²－に関する報道に対し、ベトナム人留学生、移住女性、市民団体を中心にピケット示威³が行われ

るなど、メディアで言われる「多文化議論」が美辞麗句に過ぎないことが示された。

マスメディアは社会に共有する知識を生産、再生産するという点で重要な役割を持っている。しかし、新しい社会構成員に対し、彼ら／彼女らを排除、差別するような知識や象徴を生産するメディア報道は、対等な社会構成員としての「承認」の問題において、大きな障害物になるに違いない。

本稿では韓国で近年放送された、結婚移住女性に関する時事報道番組についてテキストレベル、制作過程レベルでの分析を行い、新しい社会構成員をわれわれ（韓国人）と区別し、矮小化し、周辺部に位置づけることで、彼ら／彼女らを支配、管理、統制することの正統性を生み出す、いわゆる「他者化言説」が生み出される過程を分析する。本稿の課題は、結婚移住女性がマスメディアでどのように語られ／描かれたか、そして、それらはどのような制作過程で生産されたか、という二つである。これらの分析

*東京大学大学院学際情報学府博士課程

キーワード：結婚移住女性、他者化、マスメディア・ジャーナリズム、メディア・ディスコース・アナリシス

を通じ、ナショナルな枠組みにおいて発展してきたマスメディアがグローバル化によってもた

らされた現実とどのように向きあっているのかを、明らかにすることを目標とする。

2. 先行研究および理論的背景

2.1 「外国人花嫁」、「結婚移住女性」の表象と「他者化言説」

韓国で結婚移住女性がどのように語られ／描かれたかについての分析は、結婚移住女性が登場するリアリティ・ドキュメンタリーを分析したイ・ギョンスク(2006)を始め、ソン・ビョンチャン(2006)、パク・ソンヒ(2007)がある。これらの分析は、結婚移住女性のイメージが東南アジア、特にベトナムを中心に形成されており、韓国人の欲望や必要によって「韓国人の妻、母」のように包摂されると同時に、お金のために来た、売られた女というふうに排除される傾向があるとする。このような分析は韓国に限らず、先に「農村の嫁不足」問題で積極的に外国人花嫁を受け入れた日本においても見受けられる。主に、フィリピン女性を中心に形成されている日本の「外国人花嫁」のイメージは、「売春婦」、「被害者」(Suzuki 2003)、または「日本人男性の妻として、日本人の子どもたちの母」として頑張っている姿(山本 2005)である。日本人男性と結婚したアジア地域を中心とした外国人女性たちを、ある独特のイメージを持った「外国人花嫁」と定型化するのは、山本によれば、日本社会の優越性を確かめてくれるような、しかし、日本人とは違った、理解できない存在であると同時に、日本人になろうと努力する「他者」の存在への欲望が働いたと指摘する。

このように「外国人花嫁」、「結婚移住女

性」は、ある時はわれわれと違った、理解できない人々(お金に売られた存在、または結婚を通じてお金や就職を狙う売春婦のような存在)として表象され、ある時はわれわれの社会や文化に順応しようと必死に努力する存在としても表象される。日本、韓国という各々異なる社会的文化的コンテキストの上で、このような似た表象がなされるのは、以上の先行研究を踏まえると、新たな社会構成員である結婚移住女性をわれわれは自分の欲望を投射し構築しているということである。植民地言説について論じたバーバ(1994=2005)は、他者がイデオロギー的に構築される際に、ステレオタイプという戦略が動員されると指摘し、従順でありながら、危険な人種・性というアンビヴァレンスはステレオタイプの中核であり、「差別する力—その対象が性であれ、人種であれ、あるいは周縁と中心であれ—が用いるもっとも重要な言説的、心理的戦略の一つ」(バーバ 1994=2005:117)であるとする。すなわち、結婚移住女性の表象にみられるアンビヴァレンスは「他者」の支配、統治の戦略ともみられる。そこで、本稿では、サイド、バーバラによって形成されたポストコロニアリズムでの他者、他者化概念を採用し、支配側の眼差しで表象されることによって、支配側の利益を再生産、維持することになる女性、第3世界移住民、同性愛者などの人々が、

中心から切り離され、周辺部に位置づけられ、固定される知識、表象を含む言説を「他者化言説」と呼ぶことにする。本稿は、この「他者化言説」をテキストレベルの分析に留まるのでは

なく、その形成過程に焦点を当てることで、マスメディアにおいて「他者化言説」が形成されるプロセスを検討しようとする。

2.2 マスメディアにおける「他者化」：女性、人種的マイノリティを中心に

本稿の課題は、具体的なケースをとりあげ、他者化言説が生産される過程を実証的に検討することである。したがって、既存のマスメディア、特にニュースの生産過程における、マイノリティの表象の問題を検討しておきたい。

人種的マイノリティとメディアに関して分析したWilson and Gutierrez (1995) は、マスメディアにおける「広告」という経済的存在基盤の重要性を指摘した上で、マスメディアは「マス・オーディエンス」を獲得するために社会の規範と態度を捉え、潜在的オーディエンスを関係付けることができる「共通分母」を発達させる必要があったと指摘する。しかし、その共通分母は主に「白人」のものであり、人種的マイノリティ、移民者グループは支配的な白人の視線でステレオタイピング（定型化）され、彼ら及び彼らの社会的現実が理解されるように促されたと分析する。(Wilson and Gutierrez 1995: 41-42) ジャーナリズムの実践において、ニュースに事実性を保たせるニュース・ソースはほとんど白人であり、マイノリティの観点はニュース価値を持たないと判断される現状や、実際に人種的マイノリティがメディアに採用されても、ニュースルームにおける様々な圧力により、結局「白人の観点」を習得していかなければならないことが問題として挙げられる。(Wilson and Gutierrez 1995: 165-167) また、

アメリカの人種的マイノリティに関する報道を分析したLarson (2006) も、ニュースで人種的マイノリティに関する偏向的報道、否定的な報道が行われる原因について、ニュースメディアにおけるビジネスの側面、ニュース価値の問題、制限された時間と資源、客観性、公正性というジャーナリズム倫理、ゲートキーパーによる意図された選択を問題として指摘している。(Larson 2006: 83-84) Larsonは、このような現状の対応策として、マスメディアが同一化してきた人種的マイノリティの内部の多様性を見いだせるマイノリティ・メディアの可能性を重視した。

「人種」だけでなく、「女性」も一つの大きなグループ／カテゴリーとしてその「語られ／描かれ方」が注目されてきた。Gill (2007) によると、ニュースでの「女性の表象」には大きく二つの特徴がある。まず、女性はニュースでは相対的に現れない。仮に現れたとしても、その語られ、描かれ方は性差別的、周辺化されたものであるとする。(Gill 2007: 114) タブloid新聞などで、記事とは関係ない裸のような女性の写真がよく掲載されていることを考えると、女性の描かれ方は外貌中心的で、性差別的であることがよくわかる。Gillも「一つの持続的な発見は女性に関するほとんどのニュースが彼女らの外貌に注目する」(Gill 2007: 115) こ

とであると指摘する。すなわち、女性は彼女らが持つ「意見」や「行動」より、性差的イメージ中心に表れる傾向がある。これらに対し、フェミニズムの視座から「モニタリング」、「アクセス権の要求」、「女性主義メディアの創刊」といった戦略がなされてきた。中でも、「女性主義」を標榜したメディアの創刊は人種的マイノリティ・メディアと同様、「客観性・公正性」といった近代ジャーナリズム倫理を批判し、オルタナティブ・ジャーナリズムの実践を図ろうとするものである。

マイノリティ・メディア、オルタナティブ・メディアの対抗的公共圏としての可能性は確かに重要である。しかし、依然として、マスメ

ディア内部での変化を求めることも重要であろう。Wilson and Gutierrezは、人種的多様性の成長、メディア技術の発達、オーディエンスの細分化によって、今日では「クラス・コミュニケーション」的な状況が起こっていると指摘しながら、社会全体にとっては、マイノリティがより分断され、周辺化される恐れが残っていると指摘する。(Wilson and Gutierrez 1995: 259-261) マスメディアは、今日一見その重要性が衰えているように見えるが、高度に複雑化した現代社会において、民主主義社会の根幹となる社会構成員間の「共通意識」及び公共圏を提供するという極めて重要な機能を持っていると筆者は考える。

2.3 マスメディア・ジャーナリズムへの批判的考察

ニュースはその「事実性」ゆえに、拒否しがたい知識を生産し、その知識は「常識」として受け入れられやすい。では、人種的マイノリティや女性に対する他者化が「真実追求」を掲げる「ジャーナリズム」実践の中で行われる要因は何であろうか。ここで、政治的議論の実践というジャーナリズムと、自由主義経済システムの中で確立されたマスメディアにおけるジャーナリズムを区別し、後者を「マスメディア・ジャーナリズム」と呼んだ林(2002、2008)の議論は手助けになると考えられる。林によれば、マスメディア・ジャーナリズムは「最大多数の最大幸福」という功利主義思想を制度倫理とすることによって、「マス」オーディエンスを獲得しようとする経済面の倫理と表裏一体を形成しながら、発展してきた。そして、その「最大多数の最大幸福」は自由主義思

想の「男性的市民」像に基づいており、資本主義体制の言論・出版と共に「国語」で結ばれた「想像の共同体」、すなわち、「国民国家」を中心として実践されてきたのである。現在、この「マス」への訴求は過剰なほど、刺激的な「事実」獲得プロセスによって支えられており、それは「中心」からみて「客観・中立」であれば正当化されることになる。その中で、「中心」に立つことの難しい女性、外国人(移住者)、老人、子ども、障害者などに対する「他者化言説」が生産される可能性は高いのではなかろうか。本稿は、このような「マスメディア・ジャーナリズム」が、より多文化・多民族(多民族)化していく社会変化の現実とどのように向き合っているのかを具体的な事例の中で検討する。

3. 研究方法：テキスト分析及び制作過程分析

本稿はニュースの生産過程をも問うために、「時事報道番組⁴」のテキストとその生産過程を研究対象とする。以下、近年放送された結婚移住女性（国際結婚）に関する時事報道番組を放送局ごとに一つずつ選んだのを〈表1〉で示す。時事報道番組が研究対象となった理由は、時事報道番組のテキストレベルの分析（フレーム分析）で、結婚移住女性の他者化傾向が見られるという先行研究（ソン・ビョンチャン 2006）に加え、1～2分のストレイ

ト・ニュースより、その制作過程についてより深く掘り下げることができる判断されたからである。〈表1〉に示された三つの時事報道番組は、「国際結婚」、「結婚移住女性」をキーワードとし、三局のホームページで検索した中で、一番最近放送された番組を選んだものである。一番最近の番組を選んだ理由は、制作過程の分析において、制作者が当時の制作過程についてより明確に語るができると思ったからである⁵。

〈表1〉 研究対象：時事報道番組のテキスト及び制作過程

放送時点	放送局	時事報道番組の名前	タイトル	制作者	放送時間
2006年3月29日	SBS	ニュース追跡	実態報告、危機の国際結婚	記者	56分
2007年5月23日	KBS	追跡60分	消えさせたベトナム新婦たち、誰が彼女らを連れて行ったのか？	PD	53分
2007年7月29日	MBC	時事マガジン2580	国際結婚の陥穽	記者	20分

テキストの分析とその制作過程の分析という二つの分析を行うに当たって、Faircloughの「(メディア)言説分析」は大きな示唆をくれる。Faircloughは*Media Discourse*において言説分析をテキスト、テキストを取り巻くテキストの生産と消費（言説実践）、そしてそれらを取り巻く社会文化的実践（言説実践とテキストを規定する広範な社会的文脈⁶）がどのように互いにリンクされるのか、を問う試みとみた。（Fairclough 1995a: 16-17）本稿では、Faircloughが提示するメディア言説分析に依拠

しながら、特に、テキストとそれが生産される実践に主眼点を置くことにする。

まず、本稿のテキストの分析においては、Fairclough (1995a, 1995b)、福田 (2007) で用いられた談話分析を採用する。各々の番組をショット単位で、時間、映像内容、ナレーション、発話、テロップ、という項目でトランスクリプトし、ストーリー構成、アクター間関係、成員（結婚移住女性）カテゴリー化という枠組みで分析を行う。この枠組みは福田 (2007) に依拠しているが、それは「全て

のテキストは表象（representation）、アイデンティティ（identities）、関係（relations）を設定している」（Fairclough 1995a: 5）ことから、これらの枠組みが妥当であると考えられた。

次にテキスト分析から得られた知見を用い、各々番組の主な制作者⁷へのインタビューを行った。インタビューに関する基本情報は<表2>で示す。インタビューは半構造化インタビュー方式であり、インタビュー内容は制作過程を大きく三つの段階に分け、(1)アイテム選定

(企画)：なぜ該当テーマの放送を企画することになったのか、(2)取材及びストーリー構成過程：取材対象の選択及び取材方法はどのように行われたか、取材の中で、ストーリーとして、選択、排除されたものは何か、(3)編集過程：映像と記事原稿のマッチングはどのように行われるのか等の質問で構成した。準備された質問以外にも、インタビューの答えに対し、より具体的な説明を求めるなど、制作過程について自由に話すように促した。また、すべてのインタビューは許可の下、録音した。

<表2> 制作過程分析：インタビューにおける基本情報

インタビューー	経歴	日時	場所	インタビュー時間
SBS記者	17年（放送13年）	2008年4月25日	SBS報道局	35分
SBS作家	12年	2008年12月2日	SBS	70分
KBS PD	13年	2008年1月24日	KBS	90分
MBC記者	10年	2008年8月12日	MBC	100分

4. 他者化言説の形成過程の分析

4.1 ストーリーの構成：「共感対象＝韓国人男性＝被害者」

まず、各々番組が社会問題化しようとするテーマとそのためどのようなストーリーが構成、準備されているのか検討する。そのため、当該番組をトランスクリプト化した上、同じ内容として括られる部分を一つのシーケンスとし、いくつかのシーケンスに分けた。そして、特に、より多くの時間を費やして放送され

たシーケンスを中心に、ストーリー構成を整理してみた。以下の<表3>で、テーマ、シーケンスの数、重視されたシーケンス、ストーリー構成を概略的に表した。

〈表3〉 ストーリーの構成

	MBC	KBS	SBS
テーマ	悪徳国際結婚仲介業の告発	ベトナム結婚移住女性の家出、彼女らを引き抜くブローカーの追跡	国際結婚仲介業の詐欺的行為の告発及び国際結婚過程への支援要求
シーケンス数	7	10	8
重視されたシーケンスの内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ベトナム現場での国際結婚お見合い過程（6分21秒） ・悪徳仲介業の費用暴利問題（2分35秒） ・悪徳仲介業によって被害を受けた韓国男性のインタビュー：障害者、老人をターゲットにした悪徳行為（9分39秒） 	<ul style="list-style-type: none"> ・家出したベトナム結婚移住女性たちは誰で、どこに行ったのかの追跡（9分28秒） ・ブローカーの追跡：ベトナム人女性ブローカーの追跡（8分32秒）および韓国ブローカー（1分50秒） ・乱立する仲介業の問題：家出してしまった女性に対して仲介業は韓国男性に賠償の責任はないのか：被害を受けた韓国男性事例（9分27秒） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ベトナムでの国際結婚お見合い過程および不法行為指摘（11分53秒） ・このような過程で結ばれた国際結婚家庭、幸せか？韓国男性へのインタビュー：精神分裂症、梅毒、結婚履歴詐欺のウズベキスタン女性（10分54秒） ・結婚移住女性の苦難は？：夫を殺害したモンゴル女性、精神異常症状のベトナム女性（9分33秒） ・結婚移住女性、国際家庭への支援必要：うまく暮らしている国際結婚夫婦が多い村への取材（9分30秒）
ストーリー構成	国際結婚被害を受けた男性のインタビュー	家出した女性およびブローカーの追跡、被害を受けた男性インタビュー	被害男性の事例（結婚移住女性の問題事例）、韓国に適応して暮らす移住女性たち

各々の番組は国際結婚にまつわる問題、特に仲介業やブローカーの問題を報道しようとする。しかし、そのために準備されたストーリーは被害を受けた男性の事例や彼らのインタビューを中心に構成されている。すなわち、国際結婚にまつわる様々な事柄は「韓国（男性）にどのような被害（影響）を与えるのか」が中心となっている。たとえば、MBCでは、国際結婚の様子を6分にわたって淡々と描写した上、このようなお見合いがベトナムでは実際不法であるにもかかわらず、それに関する言及はせず、「高い費用」問題に移っている。また、KBSでは結婚移住女性を家出させる「黒い組織」への追跡を掲げているが、結局これらの問題が（高い費用を払った）韓国男性への賠償問題、仲介業による賠償責任の有無へと転換されている。SBSでは、仲介業の詐欺的な行為に

ついての告発を掲げているが、そのためのストーリーは男性の被害事例で構成されている。男性の被害事例は、エイズにかかっていた結婚移住女性、梅毒、精神分裂症、夫殺害事件などといった、女性の「問題」的な事例を羅列することで成り立っている。すなわち、テーマでは、乱立し競争する悪徳な結婚仲介業およびブローカーの行為を問題としながら、ストーリーの構成では、国際結婚の当事者である「結婚移住女性」の声は剥奪され、主に「韓国男性」、「韓国社会」にどのような影響・被害があるのかが中心となっている。では、同じく国際結婚の当事者でありながら「結婚移住女性」の声や眼差しが示されていないのはなぜなのか。MBCの記者は以下のように語った。

「実は、(仲介業による)女性の被害も取材しました。ベトナム市民団体と連絡をして、被害を受けた後、ベトナムに戻って、大変苦勞して住んでいる女性たちのインタビューもしたのです。しかし、それは最後構成段階というか、全体的な構成をする中で、抜きました。…(中略)…選択という側面で、(仲介業による)移住女性の被害があって、同じく男性の被害があるとしたときに、とにかくテレビを視聴している人たちはわが国民(韓国人)ですよ。だから、わが韓国男性の被害というものがより(視聴者に)共感できる、という部分が考慮されました。」(MBC)

このように、制作過程において、制作者は「視聴者」が「韓国人」であることを意識し、「共感対象」として「韓国人(男性)」を設定し、韓国男性の眼差しでストーリーを構成することになった。そして、韓国男性は国際結婚における、純朴な愛を持った「もっともらしい」被害者として構築される。また、このイメージに脅威になるような素材、視点は排除されることになる。

4.2 アクター間関係：結婚移住女性のアンビヴァレントな位置づけ

当該番組では、中心的なアクターとして「仲介業(ブローカー)」、「韓国人男性(およびその家族)」、「結婚移住女性」が登場する。その中で、「仲介業」と「韓国人男性」の関係はストーリー構成の分析でも確認できたように、「韓国人男性が(悪徳な)仲介業によって被害を受ける」関係であることが明白に表れている。一方、結婚移住女性は、集団お見合いの様子など、番組の様々な場面で登場はするが、

「(家出した外国人妻を探すために)アンサン駅を探しまわる旦那の切ない姿を収めようとした。しかし、その旦那に実際会ってみたら、ヤクザのような雰囲気(の人)で。ちょっと(考えていたことと)違っていたのです。その上、決定的に、その人は妻と離婚しようと思って彼女を探していたのです。(また新しいベトナム新婦と結婚するために)…(中略)…これはちょっと視聴者が受け止めるには変だと思って、それで入れませんでした。…(中略)…韓国男性の意識の中で、ベトナム女性を金で買って来るという意識が結構強いと思いました。それを告発しようかと思いましたが、結局抜いたんです」(KBS)

被害者としての韓国男性はこのように、もう一方の当事者(結婚移住女性)の脱落と「韓国人男性」=「被害者」像に対して脅威となるような素材、視点の排除によって構築された。そして、韓国男性中心の眼差しで語られ/描かれた「現実」の中で、視聴者は誰と共感すべきか、自分が誰なのか、再帰的に確認することになる。

仲介業と韓国男性が持つようなはっきりとした関係は設定されていない。しかし、韓国男性のインタビューやナレーションを分析した結果、結婚移住女性は自ら語る機会を与えられていないまま、「韓国人男性」に「問題」を起こす、「被害」を与える存在として関係付けられていることがわかった。

ナレーション：善良そうな新婦が急に外国人登録証をくれと騒いだといいます。

発話（韓国人男性）：前から登録証をくれ、
というんです。それは夫が持っていてもいいと
しても、だめだと。そして、昨夜は茶碗をキッ
チンに投げたりして、大変でした。

ナレーション：ジョン氏はこの女性が合法的
に韓国に滞留するため、自分と結婚したようだ
といます。（MBC）

仲介業による被害事例のインタビューの中
で、結婚相手の外国人女性は自分の身分証を自
ら持とうとしたことで、合法的に滞留するた
めに結婚した女性のように語られる。また、ベ
トナム人結婚移住女性が家出したことに関する
事例（KBS）では、韓国人男性の発話後、次
のようなナレーションと発話が続く。

ナレーション：息子を見守っている両親は胸
が詰まるそうです。そこで、両親は取材陣に衝
撃的な事実を打ち明けます。はじめから結婚す
る気がなかった女だといいます。

発話（金氏のお父さん）：夜寝るとき同じ部
屋でも分かれて寝るからね。息子に金をせび
ることしか考えていない。実際、息子と住む考
えのなかった嫁だ。

発話（金氏のお母さん）：うちに来て何もし
なかつたよ。その女は（一緒に）住もうとし
た女じゃなかつた。はじめから。（KBS）

仲介業の悪徳的行為やブローカーの問題を指
摘するための、具体的な事例として登場した韓
国人男性の被害事例で、結婚移住女性は「は
じめから結婚する気がなかった女」という不
純な動機を持った女として語られる。韓国人
男性中

心のナレーション、インタビューの中で、番
組の仲介業の社会問題化という狙いは、結婚
移住女性の「問題化」にもつながっている。「
共感対象＝韓国人男性＝被害者」の構築の中
で、もう一方の当事者である結婚移住女性
は自ら語る機会を与えられないまま、「問題
（集団）」として位置づけられる。

一方、仲介業の問題と共に、国際結婚家庭
への支援を求めたSBSでは、結婚移住女性
は「ありがたい存在」としても語られる。

ナレーション：モンゴルから嫁に来てから
1年半、チョイ氏の妻、バトチャ氏は韓国
語が上手になりました。舅姑は孫まで生ん
でくれた嫁に満足している様子です。

チョイ氏の母（発話）：こんなに、自分の
夫の言うことよくきくし、舅姑にもよくし
てくれるし、だからとてもかわいいわ。と
てもありがたい。

ナレーション：農作業はここで初めて習
ったというゴ氏の妻、アナリエ氏は黙々と
自分の役割をやり遂げていました。…（中
略）…若い人々が出てしまった農村、大
変な農作業もてきぱきこなす姿が村の人
々にはただただありがたいだけです。（SBS）

すなわち、悪徳仲介業の問題化において
は、結婚移住女性と同じく「問題」的な存
在として登場するが、このように、国際結
婚家庭への支援を訴えるときは、韓国に
順応した姿で賞賛される「ありがたい存
在」として登場しているのである。一方の
管理・統制すべき結婚移住女性の姿と、
支援に値するような、賞賛されるべき

姿というこのアンビヴァレントな二つの言説は、他者化言説として結婚移住女性を統制・管

理するものとなっている。

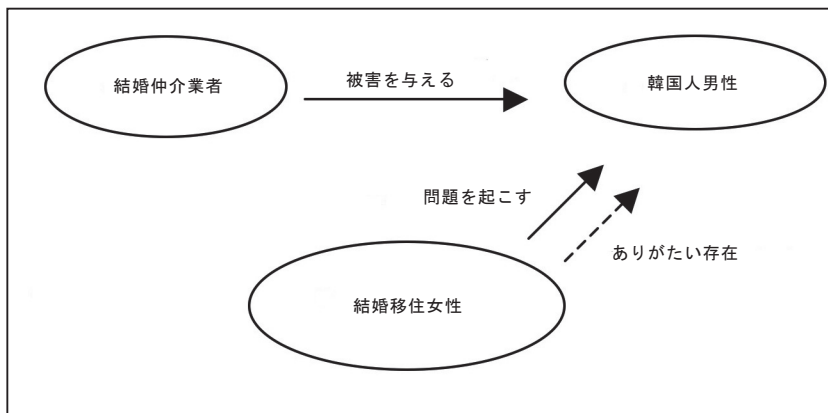


図1. アクター間関係構図

特に、「エイズ、梅毒にかかった結婚移住女性」、「夫を殺害した移住女性」など、刺激的な素材を多く取り上げていたSBSで、「ありがたい存在」としての表象が現れたのは注目に値する。SBS作家は、「ありがたい存在」としての表象の部分を入れた理由について、次のように語った。

「このようになると、国際結婚で来る女性はみんなエイズにかかった、みんな梅毒で、精神病だというふうに（感じるかも知りません）。被害者男性の視点と女性の視点、その中間をどう取ればいいのか、かなり難しく大変な部分で、様々な要素を入れなければなりません。このような部分（精神病、エイズなど）を大きく取り上げるならば、それを補うような形で。（＜ありがたい結婚移住女性＞の表象部分）この村（国際結婚夫婦が多い村）の場合もそれで入れたのです。」（SBS作家）

「問題ある女性」の部分が大きくなることに対し、「ありがたい女性」の姿を補充として入れて「中間を取る」ことは、言い換えれば、ジャーナリズムにおける「中立性」と見ることができる。「一方の話にならないように、中間を取る」という「中立性」は、しかし、その実践において「一方の側」に立った上での「中立」になっている。すなわち、韓国男性という一方側の立場に立った上で、「結婚移住女性」を「中立的に」見せようとしたのである。結局、その「中立」は問題ある女性とそうでない、よく適応した女性というふうに表象され、より権力を持っている側に奉仕する言説を生むことになる。したがって、このような形で実践されている「中立性」は他者化言説の形成の一つの要因になる。

4.3 「結婚移住女性」の 카테고리化：映像の「前景化」と「背景化」戦略の中で

カテゴリー化とは、様々な情報が伝達されたときにそれをある項目で片付けるプロセスとみることができる。したがって、カテゴリー化は情報処理において欠かせない過程でもある。しかし、「他者」のカテゴリー化の過程に潜む「他者化」という政治性と物質性⁸を考えるならば、「結婚移住女性」がどのような過程でカテゴリー化されているのかを分析することは、カテゴリーの脱構築に先立って重要であろう。放送は「映像」という複雑な情報が文字と共に伝達される点で、放送番組における結婚移住女性のカテゴリー化分析には「文字」だけでなく、「映像」をも分析する必要がある。そのため、結婚移住女性が登場する映像はどのようなものか、またそれはどのように語られているのか、「文字」とどのように結び付けられているのかを分析した。その結果、結婚移住女性は映像選択における「前景化」と「背景化」の中で「問題（集団）」としてカテゴリー化されたことがわかった。

当該番組で結婚移住女性が一番中心的に登場した場面は国際結婚の集団お見合いのシーンである。集団お見合いシーンは三つの番組全てで確認されており、特に、MBCは6分、SBSは8分程度の時間を費やし、詳細に描写している。お見合いシーンは主にベトナムでのものであるが、番組では「国際結婚」の典型的姿として取り入れられている。「ホテル（お見合い現場）に入った瞬間、取材陣は驚かざるを得ませんでした」（SBS）というナレーションで始まる映像は、顔のぼやけた、（画面から）身体の一部が切断された女性たちの姿や受動的に

選択を待つ女性の姿で構成されており、ナレーションは映像の描写が中心となっている。これら「映像中心」の場面は集団お見合いだけでなく、家出したベトナム女性への追跡（KBS）、精神異常のベトナム女性（SBS）などでも現れる。すなわち、「刺激的」なシーンは前面に出し、それを描写することで「驚き」を伝えようとする「前景化」の戦略の中で、結婚移住女性はわれわれから理解できない、驚きや恐怖の対象となる。しかし、これらの映像は人々が放送を見るようにするための「装置」として用意されているものであった。

「これ（集団お見合いの映像）はより効果的に伝達するための装置です。私たちはこの場面を見せるために放送したのではなく、言いたかったことは、（お見合いを）このようにして、また、仲介業の詐欺的行為もあるから、国際結婚に結果的に問題があって、破綻が生じる、ということです。でも、それをより効果的に伝達するために、人々が‘あ〜何これ’と見なければ…（中略）」（MBC）

一方、結婚移住女性の姿は、番組のテーマでもある仲介業の社会問題化においても登場する。悪徳な仲介業の行為や仲介業に関する法律の問題などを指摘するナレーションやインタビューの中で、集団お見合いのため並んでいる女性たちや女性の出身国の風景が流されているのである。これは適当な映像がないとき、関連のある、しかし、論難の余地が少ない映像選択という編集過程の習慣によるものであった。ナレーションでは仲介業の「社会問題化」に関す

るものであっても、それと同時に流される映像が結婚移住女性や彼女らの出身国の映像であることは、その「問題」的なイメージを結婚移住女性または国際結婚自体にかぶせる可能性が高い。このように、結婚移住女性は、映像選択に

おける「前景化」だけでなく、「背景化」によっても、「問題（集団）」という他者として描かれていた。

5. 「移住」による社会変化とマスメディア・ジャーナリズムへの批判的考察

近年放送された結婚移住女性に関する時事報道番組の分析を通じて、結婚移住女性が、統制または管理が必要な「問題（集団）」のように語られ/描かれたことを確認した。そして、時折、韓国社会が必要とする「ありがたい存在」としても促されることを確認した。このような「他者化言説」の形成には韓国人（男性）中心の視点による、「共感対象＝韓国人＝被害者」の構築とともに、ジャーナリズムの実践における中立性と「マス」への訴求が働いていた。すなわち、一方の側（韓国人男性）の視点に立った上での中立性と、人々の目を引くための刺激的な映像の使い方及び習慣的な背景画面の選びによって、「マス」である韓国人が韓国人として主体化される中で、結婚移住女性は管理、支配、統制すべき、理解できない他者として位置づけられたのである。

もちろん、記者及びプログラム・ディレクターたちは結婚移住女性の他者化を意図し、番組を作ったわけではない。時事報道番組のテーマでも確認できたように、各々の番組は国際結婚仲介業の詐欺的な行為の社会問題化を図っていた。しかし、仲介業の社会問題化が、男性像を中心とした「国民」＝「マス」に基づく「マスメディア・ジャーナリズム」においては、

結婚移住女性の「他者化言説」の生産につながる可能性が高いことが示された。移住者の増加とともに、社会変化が迫られている今日、マスメディア・ジャーナリズムにも新たな社会構成員と共生できるようなオルタナティブな倫理・理念が必要ではなかろうか。それは、「マス」として同一化されている我々を問うと同時に、「別の時間、別の空間に生き、存在するとはどういうことなのかについて、われわれ自身の感覚を変えなくてはならないという信念」（バーバ 1994＝2005: 426）から始まるものかも知れない。

本稿は近年放映された三つの「時事報道番組」を中心に分析したことで、「他者化言説」へ抵抗するような対抗的動きへの注目までには至らなかった。また、移住者などの新しい社会構成員と共生できるようなマスメディアにおけるジャーナリズムのあり方に関する構想にも至らなかった。今後は、東アジア地域の中での移住者に対するマスメディア・ジャーナリズムのあり方に関する批判的な考察と共に、多文化社会におけるオルタナティブ・ジャーナリズムへの構想を深めて行きたい。

<謝辞>

ご多忙の中、本稿における有益なコメントをいただいた指導教員である林香里教授と、本稿の校正をしていただいた学際情報学府博士課程の福博充さんに心から謝辞を申し上げます。

註

- ¹ 2008年5月、行政安全部の調査。結婚移住女性は127,683名。
- ² 国際結婚移住女性、女性結婚移民者、結婚移住女性はすべて同じ対象を表す単語である。これらの単語は政府、学界で使い始められたが、マスメディアも外国人新婦、外国人嫁という言葉と共に使うことになり、より普遍化するようになった。現在、結婚移住女性または国際結婚移住女性の意味は、広義としては、韓国男性と結婚した外国人女性を表すが、狭義としては「結婚」という移住方式を通じた外国人女性を表す。しかし、一般的に通用されているイメージは、「結婚」移住かそれとも「移住」後の結婚かに関わらず、主に韓国男性と結婚した東南アジア女性を中心に形成されている。
- ³ 朝鮮日報の「ベトナム処女たち、“希望の土、 코리아へ”」（2006年4月21日）は、韓国の未婚男性や離婚経験がある男性がベトナムの仲介業所を訪問し、ベトナム女性たちを「面接」し、選ぶという「集団お見合い」の様子を報道したルポタージュ式の記事である。しかし、ベトナムでは「集団お見合い」が禁止であったにも関わらず、記事ではそれには触れず、興味本位の描写に終わっていること、そしてベトナム女性たちの写真では「韓国の王子様、私たちを連れて行ってください」というキャプションが付けられていたことなどに対し、ベトナム留学生、市民団体は朝鮮日報社の前でビケツト示威を行った。
- ⁴ 研究対象であった三つの番組は、ニュースの「Depth Report」形式で、ジャンルとしては「ニュース・ドキュメンタリー」に該当する。韓国では、このような「ニュース・ドキュメンタリー」を「ドキュメンタリー」と区分し、「時事報道番組」と総称している。そして、その制作は、報道制作局または時事情報制作部に任されており、「ニュース」を生産する報道局（ストレイトニュース中心）と緊密な関係に置かれている。韓国で時事報道番組は大きく記者によって制作されるものと、プログラム・ディレクター（PD）によって制作されるものがある。韓国を代表する三つの放送局は「報道」に重みを置いた記者による報道番組と、「時事」情報に重みを置いたPDによる時事番組を各々せめて一つ以上は持っている。そして、時事情報番組を「社会告発性」番組として位置づける場合、「告発性」時事報道番組（例：『消費者告発』KBS）までも含むと、韓国では全体10個ぐらいの社会告発性、時事、報道番組が編成されていると見ることができる。その中で、今回分析の対象となった番組は、MBC、SBSの記者によって制作された番組とKBSのPDによって制作されたものである。どちらも「ジャーナリズム」を重要な職業倫理としてあげている。制作期間はおよそ3～4週間であり、放送時間は平日の夜10時から11時ごろ放送され、視聴率は8%ぐらいである。
- ⁵ この研究に着手したのは、2007年末ごろであったので、一番最近といっても2007年（KBS、MBC）、2006年（SBS）のものとなった。
- ⁶ クリティカル・ディスコース・アナリシスの枠組みついて、詳しくはFairclough（1995a, 1995b）、大石（2005）を参照。
- ⁷ SBS、MBCの場合、記者が担当ディレクターで、KBSはプログラム・ディレクター（PD）が担当ディレクターであった。担当ディレクターはアイテム選定から編集までの過程の決定にすべてかかわる。
- ⁸ 「もしも『女』がただの空疎なカテゴリーだとしたら、なぜ私は夜の一人歩きを恐れるのか」というローラ・ダウンズの問いはカテゴリーの物質性を如実に表している。

参考文献

- バーバ, ホミ (1994=2005) 『文化の場所：ポストコロニアリズムの位相』本橋哲也ほか訳、法政大学出版局。
- Carter, Cynthia, Gill Branson and Stuart Allan eds. (1998) *NEWS, GENDER and POWER*, London; New York: Routledge.
- Downs, Laura L. (1993) "If 'Woman' Is Just an Empty Category, Then Why Am I Afraid to Walk Alone at Night?: Identity Politics Meets the Postmodern Subject" *Comparative Studies in Society and History*, 35(2): 414-437.
- Fairclough, Norman (1995a) *Media Discourse*, London; New York; Auckland: Edward Arnold.
- Fairclough, Norman (1995b) *Critical Discourse Analysis*, London; New York: Longman.
- Gill, Rosalind (2007) *Gender and the media*, Cambridge: Polity Press

- ハーバーマス, ユルゲン (1962=1994) 『公共性の構造転換 市民社会の一カテゴリーについての探求』 細谷貞雄・山田正行訳, 未来社.
- 林香里 (2002) 『マスメディアの周縁、ジャーナリズムの核心』 新曜社.
- 林香里 (2008) 「マスメディア・ジャーナリズムを支配する「最大多数の最大幸福」の最大不幸： 職業倫理の検討とその刷新の可能性」 『論座』 7: 26-31.
- Howarth, David (2000) *Discourse*, Buckingham; Philadelphia: Open University Press.
- 福田充 (2007) 「イスラムはどう語られたか? -国際テロ報道におけるイスラム解説の談話分析」 『メディア・コミュニケーション』 57: 49-65.
- イ・ギョンスク (2006) 「混種のリアリティプログラムに包摂された難散人のアイデンティティ: <ラブ・イン・アジア>のテキスト分析」 『韓国放送学報』 20 (3): 239-277.
- 大石裕 (2005) 『ジャーナリズムとメディア言説』 勁草書房.
- バク・ソンヒ (2007) 「言論分析を通じてみた結婚移住女性の定型化と他者化」 釜山大学大学院修士論文.
- サイード, エドワード (1978=1993) 『オリエンタリズム 上/下』 今沢紀子訳, 平凡社.
- サイード, エドワード (1993=1998) 『文化と帝国主義』 大橋洋一訳, みすず書房.
- ソン・ビョンチャン (2006) 「国際結婚に関するテレビ時事ドキュメンタリーの『プレイング』」 ソガン大学新聞放送学修士論文.
- Suzuki, Nobue (2003) "Transgressing 'victims' Reading Narratives of 'Filipina Brides' in Japan", *Critical Asian Studies*, 35 (3): 399-420.
- Tuchman, Gaye (1978=1991) 『ニュースの社会学』 鶴木真・櫻内篤子訳, 三嶺書房.
- 鶴木真編 (1999) 『客観報道：もう一つのジャーナリズム論』 成文堂.
- 上野千鶴子編 (2001) 『構築主義とは何か』 勁草書房.
- Van Dijk, Teun A. (1988) *News as discourse*, Hillsdale, NJ: L. Erlbaum Associates.
- Wilson II, Clint C. and Felix Gutierrez (1995) *Race, multiculturalism, and the media: from mass to class communication*, Thousand Oaks; London: Sage Publications.
- 山本薫子 (2005) 「『日本人』が持つ二つの鏡—1980年以降の日本における外国人表象をめぐって—」 狩谷あゆめ編『文化とアイデンティティをめぐるポリティクス』 広島修道大学研究叢書 133: 1-19.



李 美淑 (イ ミスック)

[最終学歴] ソウル大学消費者学・言論情報学卒業。東京大学大学院学際情報学府修士課程修了
 [専攻領域] マスメディア、ジャーナリズム研究
 [所属] 東京大学大学院学際情報学府博士課程、NHKアーカイブス・トライアル研究員
 [所属学会] 日本マス・コミュニケーション学会、日本社会学会

Media Discourse on Migrant Women in South Korea : The “Othering” Process in Mass Media Journalism

Misook, LEE*

Abstract

This study examines the “othering” process of migrant women in mass media journalism in South Korea. Since the 1990s, the number of migrant women who married Korean men has increased, and especially after 2003 their existence became conspicuous in the media, which reports on migrant women mainly from Southeast Asia. Although Korean society is gradually becoming multi-racial/cultural, according to previous research about the representation of migrant women, new social members – migrant women – are excluded and othered in the mass media. In order to examine the issue in further depth, production and text analyses were conducted so as to articulate the process of “othering” at the production level. Text analysis was conducted on news documentaries about migrant women, from the main broadcasting companies in Korea, and the key directors of each documentary were interviewed. Analysis revealed that migrant women were being othered, categorized as a ‘social problem’ which could damage or create problems for Korean men and Korean society. At the production level, the ‘Korean-male-centered’ perspective and the desire to obtain a ‘mass’ audience were strongly contributing to the “othering” of migrant women. As a result, the present journalism practices in the mass media are seen to be contributing to the problem, rather than acting to create social solidarity across social categories.

*Doctoral student in the department of Interdisciplinary Information Studies at the University of Tokyo

Key Words : Migrant women, Othering, Mass media journalism, Media discourse analysis.